

2021年2月7日 説教「愛に基づく知恵」

創世記 47章 13～20節

ヨセフはパロの指示に従い、父ヤコブ（イスラエル）の家族をゴシエンのラメセスに住ませ、ヤコブの余生の安住の地も確保されました。

1. 食物を求める人々（13～15節）

①飢饉は続き（13）「**ききんが非常に激しかったので、全地に食物がなく、エジプトの地もカナン**の地もききんのために衰え果てた。」ヤコブやヨセフが生きていた世界の飢饉は続いていました。それも非情に厳しい状態であったのです。どこにも収穫がないという状態です。ですから、ヤコブ達が根拠としていたカナンはもとより、備蓄のあるエジプトでも収穫がないという点では同じでした。ヤコブの一家は、本当にぎりぎりのところで、飢え死ぬことから免れたと言っても過言ではないでしょう。ですから穀物の備蓄のあるエジプトでも、庶民は食物については、絶えず困難を覚えていたのです。庶民の食事、生活は危機に瀕していたといつて良いでしょう。

②銀をパロに（14）「**それで、ヨセフはエジプトの地とカナンの地にあつたすべての銀を集めた。それは人々が買った穀物の代金であるが、ヨセフはその銀をパロの家に納めた。**」かつてヤコブの息子達が食糧の調達のために、エジプトに来た時に、その代価として差し出したのは銀でありました（42章）。各国からの来訪者達も銀で食糧調達をしたのです。現代でも金や銀は経済の重要な価値基準でしょう。エジプトの国の宰相として、ヨセフはこの銀を国に蓄積して国の経済基盤を整えようとしたのです。これまでエジプトやカナンの地で獲得した銀を確保するために、これを集めてパロの家に納めたのです。いわば、エジプトの国の大金庫に銀をしまったのです。

③エジプト庶民の陳情（15）「**エジプトの地とカナンの地に銀が尽きたとき、エジプト人がみなヨセフのところに来て言った。『私たちに食物を下さい。銀が尽きたからといって、どうして私たちがあなたさまの前に死んでよいでしょう。』**」これまで銀を対価として、食糧の提供をしてもらってきたカナン諸国の銀も、ついに尽きてしまいました。それはまた、エジプトの庶民においても全く同様でありました。そこで、エジプトの民は宰相ヨセフに、食物を分けてくれるようにと折衝したのです。そして、もはや銀はどこにもありませんでしたが、訴えかけたのです。「銀がないからといって、私たちが飢え死して良いのでしょうか？」と問いかけたのです。

2. 家畜、からだ、農地（16～18節）

①家畜と引き換えに（16）「**ヨセフは言った。『あなたがたの家畜をよこしなさい。銀が尽きたのなら、家畜と引き替えに与えよう。』**」エジプトの民に銀が尽き、食物を求めに来たのですが、ヨセフは温情を示すのではなく、食糧は家畜と引き換えにするというのでした。家畜は



民の仕事や生活にも不可欠であることは、かつて牧畜をする一家の中にいたヨセフですから、心得ていたはずです。それなのに、ずいぶんと厳しい言葉です。家畜をよこしなさい、という非情な言葉なのですから。

- ②家畜と引き換えに (17)「彼らがヨセフのところに家畜と引いて来たので、ヨセフは馬、羊の群れ、牛の群れ、およびろばと引き換えに、食物を彼らに与えた。こうして彼はその年、すべての家畜と引き換えた食物で彼らを切り抜けさせた。」民も背に腹は代えられません。家畜を引いてきました。民は馬、羊、牛、ろばを差し出すことによって、食物を得ることになりました。動物たちは彼らにとって、かけがいのない財産であります。まずは食糧を確保するしかなかったのです。
- ③からだと農地だけ (18)「やがてその年も終わり、次の年、人々はまたヨセフのところにやって来て言った。『私たちはあなたさまに何も隠しません。私たちの銀も尽き、家畜の群れもあなたさまのものになったので、私たちのからだも農地のほかには、あなたさまの前に何も残っていません。』」その年、民はなんとか窮状をしのぎましたが、翌年になってまたヨセフの所に来て訴えます。つまり、銀も家畜もすべてはエジプトという国に渡したので、もはや残るものは自分たちの身体と農地以外は何もないと実状を伝えたのです。食糧についての言及がないほどに、失望していたのでしょう。

3. 何もかも差し出し (19~20 節)

- ①農地と私たちを (19)「『私たちはどうして農地といっしょにあなたさまの前で死んでよいでしょう。食物と引き換えに私たちと農地とを買い取って下さい。私たちは農地といっしょにパロの奴隷となりましょう。』」民再度やってきて、彼らも必死でした。「私たちが死んでもいいのですか」と窮状を伝えます。そして、食物と引き換えに、農地とを差し出し、自分たちは奴隷にしてくださいと頼んだのです。もうそれしかなかったのですから。
- ②種をください (19)「『どうか種を下さい。そうすれば私たちは生きて、死なないでしょう。そして、土地も荒れないでしょう。』」飢饉が続いて既に5~6年経っていると思われます。そこで、「種をください。」と願うのです。そろそろ、それを蒔けば収穫ができるかもしれないのです。それに、耕すことによって荒れた土地も、これ以上は荒れることがないでしょうから、ということでしょうか。
- ③全農地を買い取り (20)「それでヨセフはエジプトの全農地を、パロのために買い取った。ききんがエジプト人にきびしかったので、彼らがみな、その畑地を売ったからである。こうしてその土地はパロのものとなった。」民は自分たちの持っている農地を食物と交換します。もう、それ以外に方法はなかったのですから。それを受けて、ヨセフ

はエジプトの農地を買い取ることにします。パロのためにという表現は、民が売った土地は国のものになっていったということです。

《結論》

今朝の聖書箇所には政治家としてのヨセフの一面が記されています。もともとヨセフが宰相に立たされたのは、獄中から呼び出されてパロの見た夢の解き明かしをした事に始まります。七頭のやせた牛が七頭の肥えた牛を食べてしまうという夢は、七年の豊作の後に七年の飢饉が来るという意味だと解き明かしました。それを受けて、パロは彼を宰相に登用しました。ヨセフは早速、豊作に備えて、全国を巡ってたくさんの穀物倉を造ったのです。そして七年の豊作の時に、無駄使いをさせずに穀物を大量に貯蔵したのです。そして、各国から食物譲渡の申し込みがあった時に、銀を対価として食糧を分けることができました。その中にヤコブの家族があって、再会の出来事があったことはこれまで読んできた通りです。

しかし、倉に穀物が貯蔵されていたとはいえ、民衆が腹いっぱい食することができていたかと言えば、そうではありませんでした。ヨセフは限られた穀物を厳しく管理していたようなのです。エジプトの民でも、食物を得るために、対価を払って、手にいれなくてはならなかったのです。今朝の聖書箇所には、エジプトの民が自分達の財である銀、家畜、土地までも売って、食物を得ている様子が記されています。実をいえば、これはヨセフ政権の政策でもありました。食糧全体の量は限られていました。ですから、富を国に集め、家畜を殺して食べてしまわずに生かしておき、土地も国有にして、できるだけ食糧を分け合うことを目指したのです。

ヨセフはその政策を、信仰に基づいて行ったと考えられます。箴言 29:4 に「王は正義によって国を建てる。しかし重税を取り立てる者は国を亡ぼす」とありますが、ヨセフが民に課したのは重税ではなく、飢饉が終わるまでは、皆が食べていくことができるように、対価をもって食物を得させるようにしたと考えて良いと思われまます。

使徒パウロコリント人への手紙第一の 1:20 では、「神はこの世の知恵を愚かにされた」とあり、2:7 には「隠された奥義としての神の知恵」という言葉を用いています。それでは、神の知恵とはどんなものでありましょうか。それは一言でいえば、アガペー（神の愛）に基づく、神の知恵でありましょう。ヨセフは、神の愛に基づき、知恵をいただいて、厳しく思えますが、この章にある政策をとったと理解できます。

私たちが教会として、何らかの判断を迫られる時にも、神の愛に基づく知恵を求めます。そして、御霊に導かれて良き判断をいただいきたいものです。個人においても同じです。その時々、神の愛に基づく知恵をいただきたいのです。「愛は寛容であり、愛は親切です。人を妬みません。・・・礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず・・・不正を

喜ばずに、真理を喜びます。・・すべてを耐え忍びます。」（I コリント 13:4～）。

2月の歩みが進んでいきますが、コロナ時代において、愛に基づく知恵をいただきつつ、歩んでいきましょう。